

18年度
第1回
060712

「地域で支える高齢社会」—高齢者の健やかな生活を地域でどう支えるか—
平成18年7月12日(水) 午後6時～9時

ゲスト
報告

丸子地区すこやか活動推進委員 渡辺勝久
大戸地区すこやか活動推進委員 三川幸子

渡辺 丸子地区では、すこやか活動を老人クラブ、民生委員、ボランティアなどの協力で平成14年から5会場で実施している。

三川 「トロッコ押し手の会」では、2DK63㎡の部屋を「駐車場」として借りて活動をしており、すこやか活動を平成13年から行っている。

渡辺 今、一番大きな地域の問題は高齢者の問題だと思っている。一人暮らしのお年寄りは行き場がない。地域で住んでいるお年寄りが健康で、本当に毎日楽しく過ごせるような活動にしていきたい。

三川 「駐車場」の理念がすこやか活動の理念でもある。地域は休息の場であったり、活動の場、会話の場、子どもやお年寄りの成長の場であったりする。これからの社会はこういった点で役に立つのが高齢者で、子どもを指導しようというのではなく、自分の生きがいへつなげていく、役に立っているというのが高齢者にとってとても若々しく表れると思っている。

渡辺 すこやか活動は、介護予防の目的でおおむね中学校区(51区)に一つということで、計画では市全体で60箇所となっている。中原区では中学校が8校あるのに、すこやか活動は2カ所のみである。これは何とかしなければならない。社会福祉協議会の問題でもあるし、行政の問題でもあることから、区民会議でじっくり相談していただいて普及させてもらいたい。

三川 日本では、一人に対し介護保険と医療保険が皆保険としてある。病気になると医療保険の割合が大きくなり、介護保険が軽くなる。入院すると医療保険のみ。退院すると医療保険が軽くなっていく。介護保険も医療保険もほどほど使わないで元気でやっていこうじゃないか、というのが今の介護予防で行われている高齢社会の現状である。

渡辺 活動をみなさんの力で面にして、できるだけ認知症の人を出さないようがんばっていききたい。

三川 活動は自分たちで広げていかないといけないので、点をつなぎ面につながるよう、町内会、民生委員・児童委員とかにお願いもしながら、点のところへみんなで行ったり、出前をしたりしている。みんなで“お互いさま”ができるよう活動している。



ボランティアを先生に、みんなで体操(丸子地区すこやか活動)



ボールを使って体操を楽しく(大戸地区すこやか活動)

ビデオ
報告

丸子地区すこやか活動
大戸地区すこやか活動

参加者の声から

「みなさんの顔を見るだけで元気が出ます。」

「楽しみはみなさんとのコミュニケーション。笑いがあるっていうのは、素晴らしい。」

「家で留守番してポツンとしているんじゃ、いいこと考えない。ここでみんなでウフフ、アハハ笑っていれば、一日暮れちゃう。」

活動を支えるスタッフから

「自分が病気になった時にお世話になったことを、今みんなに返している。」

「子どもが野球で地域にお世話になっている分、お返しできれば、と思って始めた。」

「天国の父と母に会えるような気がしてすごく楽しい。私の方が癒されています。」



商店街の事務所を借りて、会で作ったタペストリーを展示（大戸地区すこやか活動）

主宰者から

「地域の人が交わってくると、お年寄りだけでなく成人も子どもも地域のつながりができてくる。これがまちづくりの原点ではないか。」 渡辺勝久

「駐車場の2番目、3番目ができることをみんな願っている。1小学校区に一つくらいできればいいなあ、と思っているが、なかなかできない。これはみんなノウハウが大変なのかな、と思っているが、やってみないと分からないならやったらいい、と思ってやっています。」 三川幸子

会議での意見

- ・高齢になってもできるだけ自立して生活できるよう、近隣との交流をもっと深くすることを考えたい。高齢で体の不自由な方、一人暮らしの方などを町内協力して把握していきたい。高齢者だけでは企画・運営がなかなか難しいので、こども会のお母さんにも加わってもらって、今までの老人クラブに新しい風を入れていくのがいいと思っている。町会、老人クラブ、ボランティア団体とでできることからやっていきたい。町内会館が一番近く、親しみやすいので、そこを拠点に、講座や健康に関することをやっていきたい。
- ・今、高齢者の生き方というのが非常に難しいのではないかと。三川さん、渡辺さんのようにいろいろ相まった形をつくっていけば、建設的な明るい高齢社会ができるのではないかと。町会を中心に活動するのなら、できるだけお互いの意見をよく聞いて、また若い人も参加できるようなプランニングにすれば、生き生きとした高齢社会に結びついていくのではないかと。
- ・どういう社会活動をするにしても、核になる人が非常に大切。中原区はボランティア活動をする人が少ない気がするので、区民会議などでもっといろいろな人と協力できるような働きかけや声かけをやっていきたい。
- ・子育てサロンを区内14箇所で行っているが、すこやか活動と合体して、地域の家族となるよう、高齢者と保護者、子どもとの触れ合いの場をつくっていただきたい。
- ・区PTA協議会を務め、小学生の子どもがいるので子育てが100%の状態だが、今日の報告を聞いて、初めてこういう活動を知り、また自分の両親も地域で支えられているんだと分かり勉強になった。私みたいなお母さんがたくさんいるので、高齢社会についてもっと知ってもらうことができればいいと思っている。
- ・人、拠点、財源の3つの条件がそろえば福祉というのは完成とよく聞くが、財源については結構苦労することは確かだと思う。中原には60の町内会館があるので、すこやか活動を普及するにはそういう所をどんどん利用して、また人材の養成もすれば何とかなるのではないかと。

地域での取組

会議を一つのきっかけにして、中原区の「すこやか活動」は 20 年度から 2 箇所増え、計 4 箇所になりました。丸子地区では、新設の老人いきいの家を利用して新たにすこやか活動をはじめ、地区全体で会を広げています。

また、子育てサロンにお年寄りを招いたり、町内会館でおしゃべり会を開催したりと、地域で高齢者を支える取り組みが広がっています。

1. 「つきやまサロンすこやか会推進委員会」

西丸子小学校地区で閉園された幼稚園の教室を利用して開催されている「つきやまサロン」。

活動に参加しているのは、ゼロ歳児から高齢者まで。

幼稚園保護者OB会をはじめ、多くの地域の人の協力で、会は今年 7 年目を迎え、20 年度から会は「すこやか活動」に認定されました。

取材当日、午前中は区役所保健福祉センターによる講座「安全な食の取り方」、お昼の「手作り昼食会」、午後は太極拳教室毒島先生による「優しい体操 10 分間」、老人病研究会佐久間先生による「健康年齢測定値の変化とウォーキング」、お茶タイムと盛りだくさんです。

サロンのモットーの一つは「子どもが育ちやすい環境づくり」。同じ敷地内に自主保育のサークルが活動していることもあり、地域文化である「小杉雛子保存会」や紙飛行機教室、「子育てほっとルーム」など世代間交流も生まれています。「ママたちが安心

できる町を作ることは、自分たち高齢者も安心して暮らせる町を作ることに通じると考えています」と代表の遠藤敦子さん。「ここが高齢者のみなさんにとって自分らしい元気な生活をしたい、それをかなえる場であればいいな、と思っています。相互ボランティアという考え方で行動することで“高齢ロマン”をかなえたい」と話します。現在、車で送迎ができるボランティアを募集中とも。

今月も絵手紙教室や日本野鳥の会による「等々力緑地を楽しむ会」など、地域ぐるみのプログラムが盛りだくさんに行われています。

※【平成 20 年 3 月 27 日取材予定】



講師を招いての絵手紙教室



隣接するわくわくプラザとの交流も行っています

2. 「玉川地区すこやか活動地域推進委員会」

玉川地区では、上平間第二町会を母体とした活動が行われています。

その取り組みの一つである「独居老人等見守りネットワーク」は、月 1、2 回、地域を 20 の地

区に分けて町内会役員や民生委員・児童委員を中心とした地域連絡員が自宅を訪問して話し相手となり、必要があれば地域包括支援センター、区役所、消防署などの各機関と連携して対応します。この取り組みは、平成7年の阪神大震災がきっかけとなり、自分たちのまちは自分たちで守っていこうと、平成13年から始まりました。現在、希望する約200世帯を見回っています。

「お年寄りはどうしても引きこもりがち。できれば高齢者が全員希望して見回りをしたい。高齢者の把握ができれば、いざという時の手だてになる。全員を救助できるような体制をつくりたい」と話すのは代表の山上正さん。見回りを続けていると、玄関先での話もだんだん長くなり、こうした活動がまちの活性化につながっているそうです。また、民生委員・児童委員の秋元藹子さんは「高齢者の方からは、民生委員だけでなく町会の人も来てくれる、とずいぶん喜んでもらっています。また、月1回“高齢社会対策委員会”として全地区の活動報告を行っているので、自分が直接行かなくても他地区の高齢者の様子が分かるので助かります」と話します。

取材に同行した班では、土曜日の午前中10軒ほどを回りました。「やっぱり会社をやめてしまうと、だんだん人から離れてしまいがちになってしまう。こうして来てもらって世間話をしてくれると外に出て歩いてみようかな、と思うようになって、それはうれしいことです」と地域の方は話してくれました。町内会役員の江原照子さんは「顔見知りがたくさんできて、まちの中で声かけをするようになった」と話します。

玉川地区ではこのほかに、地域包括支援センターでのミニデイサービス、老人会、趣味の会などの活動も盛んです。また、高齢者による登下校時の子どもたちの見守り活動は、高齢者も社会的役割を担っていることを自覚し、社会へ参加している意識だけでなく、生きがいをも見つけることにもつながっています。

【平成18年9月23日取材】



見回りに出発。目印はお揃いのオレンジ色のキャップです



玄関先で会話がはします

3. 子育てサロンでの取組み ―子育てサロン「とどろき」―

とどろき老人いこいの家で毎月第4水曜日に開催されている子育てサロン「とどろき」。

平成17年、地区で子育てサロンを開こうとボランティアが会場を探している時、小杉2丁目町内会の吉房会長が相談にのり、いこいの家の使用について協力してくれたそうです。こうして、老人いこいの家でのサロン開催が決まり、この環境を生かすプログラムが始まりました。

会のテーマは、ずばり「地域との高齢者とのふれあい」。

会ではボランティアスタッフやゲスト講師に地域の高齢者、いこいの家に来ている高齢者を迎え

入れ、着古した浴衣をほどいておしめにする仕方を教えたり、「子育ていま&むかし」と題して子育てのコツを伝授したりしています。

「今の保護者はおじいちゃん、おばあちゃんがいらない世帯がほとんどなので、この会に来ると安心してもらえるようです」とスタッフの松本玲子さん。

いこいの家に遊びに来ている高齢者も一緒に会に参加します。

この日は保育士が来て子育てのアドバイスをしたり、一緒に歌を歌ったり、また地域の高齢者が先生役役となり、おいしい日本茶の入れ方の講義もありました。

「私の家は農家だったので、子どもはおじいちゃん、おばあちゃんに育てられた。だから、今度は私が育ててあげようと思ったけど、今はそういう時代でなくなってしまった」と会に参加していた岡崎貞子さん。普段はこのいこいの家の常連さんです。子どもはかわいいねえ、と終始にこやかでした。

子育てサロンと高齢者との交流は、丸子多摩川老人いこいの家でも行なわれています。

【平成 20 年 2 月 27 日取材】



いこいの家を利用する地域の高齢者のみなさんも参加。中にはスタッフとして参加する人も



「今まで会社のつきあいしかなかった。ここではいろいろな人と話ができる。つながりが広がりました」と話す渡辺清さん（右）

4. そのほかの取組み

〔地域で〕

- ・丸子地区では高齢者を対象者にした「丸子地区すこやか会」を立ち上げ、丸子多摩川老人いこいの家の開所をきっかけに、丸子地区全体で取り組みを始めた（以前は9町会中5町会での「すこやか会」だった）。また、丸子多摩川老人いこいの家では、隔月一人暮らしの会食会を開催、手作りメニューと瀬戸物の食器で喜んでもらっている。
- ・小杉地区では「小杉地区福祉の心推進実行委員会」を立ち上げ、小杉地区町内会連合会、小杉地区社会福祉協議会と合同で平成 19 年 2 月に「福祉の心を共に学び合おう」という講座を開催した。150 余名が集まって、地域のボランティア活動や高齢者の生きがいについての話し合いと介護予防体操を行った。
- ・「多摩川とどろき土手の桜を愛する会」による桜の記念植樹に地域の高齢者に参加してもらえるよう、「つきやまサロン」を通じて呼びかけを行い参加につながった。
- ・丸子地区では、民生委員・児童委員が中心となり「災害時一人も見逃さない運動」として災害弱者名簿の作成を始めて2年が経過した。更新作業も進み、名簿登録者も増えてきた。
- ・新丸子こども文化センター運営協議会では、卓球の講師を招いて、高齢者と地域の子どもたちを対象に「高齢者とのふれあい卓球大会」を現在企画している。
- ・小杉2丁目町会では福祉部をつくり、役員、民生委員・児童委員とともに一人暮らしの高齢者の家を訪ね、声かけ運動を行っている。
- ・小杉2丁目町会では、町内会館で「おしゃべり会」という高齢者が集まって自由にお互いの話をし合う会を開始した。

[行政として]

- ・「わたしの町のすこやか活動推進委員会」の趣旨を町内会、老人クラブ、地区民生委員児童委員協議会、ボランティア活動団体などに説明し、啓発活動を行った。
- ・中原区社会福祉協議会と連携し、他区の活動団体を招き地区社会福祉協議会関係者を対象に「わたしの町のすこやか活動推進委員会」の研修を開催した。
- ・「丸子地区すこやか活動支援推進委員会」が行ったボランティア募集を支援するため、インターネットによる広報を行った。
- ・「小杉地区福祉の心推進実行委員会」の活動を支援する広報を行った。
- ・区民を対象に、介護予防への関心を高め、保健福祉センターが実施する各種介護予防事業に積極的に参加し、自身の介護予防に努めることができる人の育成を始めた。意識や知識を高め、介護予防活動を行う自主グループのボランティアとして活動できる人の育成をめざしている。
- ・高齢者の心身の健康の維持、保健・福祉・医療の向上、生活の安定のために必要な援助、支援を包括的に行うため設置した地域包括支援センターで高齢者の実態把握に取り組んでいる。
- ・中原区老人クラブの健康づくり活動、地域づくり活動に職員を派遣し、支援を行った。
- ・介護予防の自主活動団体に、地域の町会や地区社協などと連携した「すこやか活動」の取り組みを呼びかけた。
- ・「なかはら福祉健康まつり」において、高齢者に必要な支援を包括的に行う拠点としての地域包括支援センターの広報を行った。
- ・各地区の社会福祉協議会を対象にした地域福祉講座を実施し、「丸子地区すこやか会」の開設に寄与した。

ゲスト
報告

川崎市立中原小学校校長 白井達夫

白井 子どもの登下校の安全を守るお手伝いを地域の方にお願いして、安全パトロール隊が結成された。子どもを守ることと同時に、子どもを育てることの両立を目指したい。

子どもを不審者から守るのに、行き帰りは親が見守り、学校の中では遮断するといったふうに子どもを大人の手に引き寄せたまましていると、その子どもを守ることが、実は人と関わりを持つ、人を信じる、愛するといった心情を育て切れないことにつながるのではないかな。

どんなふうに子どもを守っていくか、一つ目は子ども自身の自ら守る力を育てることがあるのではないかな。中原小学校では年2回防犯教室を開催し、安全指導員による指導を受けている。二つ目は学校の敷居を低くし、いろいろな人に学校に入ってもらい、見守ってもらうということ。夏休みのふれあいスクールでは、川崎フロンターレや富士通レッドウェーブ、地域の方などに講座を開いてもらっている。三つ目として、毎朝生徒と先生とが校門に立ってあいさつ運動を行っている。

あいさつ運動を学校だけでなく地域に広げていくというのは、ご近所づくりだと思っている。中原小学校の恵まれた環境として、一つはPTAによるパトロールや子ども110番がある。二つ目は、小学校と中学校の連携が強く、宮内小学校、宮内中学校を合わせた3校で協力して取り組みを行っている。三つ目に地域教育会議が活発なこと。中原小学校、宮内小学校、宮内中学校の3校で開催している。



宮内・中原安全パトロール隊による中原小学校児童の見守り活動



中原小学校校門前のあいさつ運動

ビデオ
報告

川崎市立西丸子小学校、川崎市立新城小学校、川崎市立中原小学校における
地域ぐるみの見守り活動

活動を支えるスタッフから

「あいさつを通して、逆に大人の方が元気をもらっている」

「異学年の親同士のつながりも生まれた」

「この子らに恩返しでやっている。みんなそうだと思いますよ」

主宰者から

「西丸子小では、子どもとコミュニケーションを取り、子どもの心を豊にして犯罪の芽を摘もうとあいさつ運動を始めた」 丸子地区民生委員児童委員協議会会長 青木英光

「新城小のあいさつ運動は地域との連携、ボランティアの参加」前区民生委員児童委員協議会会長 三竹和子

「学校としてのうれしさは、あいさつ運動を通して地域と子どもが密接に関わって守っていけること。」新城小学校教頭 山田義弥

「子どもを囲い込むだけだと育たない。このパトロールのいい所は、安全を守るだけでなく、子どもの心も育つ。」中原小学校長 白井達夫

「地域が復活してほしい。地域が支えあう共同体になれば、それが子どもの安全には一番いい。地域がばらばらになってきたその隙間に、犯罪者が入ってきている感じがしている。隙間を埋めるのは、コミュニケーション、地域の交流。パトロール隊のような人たちの働きで地域がもっと密になればいい、と思っている。」中原小学校長 白井達夫



新城小学校校門前のあいさつ運動



西丸子小学校校門前のあいさつ運動

会議での意見

- ・中原区民生委員児童委員協議会として、あいさつは生活の基本となること、また学校との垣根をできるだけ低くしたいことから、あいさつ運動を始めた。
あるまちでは、お年寄りが下校時間になると玄関先に椅子を持ち出して腰かけ、子どもたちにあいさつをしていた。ところが何日か見かけないことがあり、子どもたちが気にかけて先生にその話をしたところ、体調のすぐれないそのお年寄りを救うことができたという。
- ・青少年指導員とPTAだけでは見守り活動をやり切れないところがあるから、ぜひ町内会などにも輪を広げていきたい。
- ・事件については警察とも情報共有して、どの辺りにポイントを置いたらよいか検証をしたらどうだろうか。また、川崎は外から来ている人がたくさんいるので、町内会にできるだけ取り込んで行事に参加してもらえるような雰囲気づくりをお願いしたい。
- ・地域力を高めていくことが大事ではないか。地域で叱り育て、地域で活動していくことを心がけていきたい。また、学校だけでなく地域で見守りを進めていくために、この区民会議を通じて率先して地域の人たちに取り組みを広めていきたいので、協力をお願いしたい。
- ・中原区は商店街の活動が非常に盛んだが、安全な商店街、お買い物しやすい商店街をつくっていく一環として、こういった安全・安心への取り組みにも積極的に参画していくことが必要と考えている。商店街としても地域の宝である子どもたちを見守っていく活動にぜひ参画したい。
- ・放置自転車をなくす活動をしていると、抑止力について効果があると実感する。ぜひ見守り活動を根気良く続けていただきたい。また、まちに死角のない環境をつくるのも大切な行動ではないか。例えば塀の高さを1mくらいにして見通しのいいまちにすると犯罪の芽が摘めるのではないかな。

- ・武蔵小杉駅周辺の再開発でこれから新住民がどんどんやってくる。元々住んでいる我々と新住民とが一致団結して子どもたちを守るというような目に見える活動がなければならないのではないか。
- ・公共施設、例えば老人いきいの家などで世代交流をし、人権感覚を養ったらどうか。

地域での取組

会議後、本月4丁目共和会では自動車に青色防犯灯をつけたパトロールが始まりました。また、小杉2丁目町会では青色防犯灯の設置を試験的に実施しました。

1. 「本月4丁目共和会—青色回転灯装着車でパトロール—」

本月4丁目共和会では、12年に始まった徒歩によるパトロールに加え、19年9月から「青色回転灯」を装着した自動車によるパトロールも開始しました。

この取り組みを始めたきっかけは、町会役員からの「もっと防犯活動を充実させよう」という提案。「自動車でパトロールすると、少人数でも町内のすみずみまで回れるだけでなく、町内会は積極的にパトロールに取り組んでいる、ということを地域の人たちに知ってもらえるようになったよ」と石井信男会長。

というのは、同会はこれまでも、週に一回グループ6人ほどが小学生の下校時間や夕方の買い物時間帯などにパトロールを行っていました。

ところが今回、「青色回転灯」装着自動車を取り入れたことで、2名一組という少人数でパトロールできるようになりました。今まで週1回だった活動を3回に増やすことができただけでなく、徒歩で回っていたときに比べ、町内の皆さんにパトロールの存在を知ってもらうことにもつながりました。

『ご苦労様』と声を掛けられると励みになる」、「パトロールに参加することで、子どもたちや地域の人たちとの会話が増えた」など、やりがいを感じている声が聞かれました。

【平成19年10月取材】



本月4丁目共和会での青色回転灯装着車によるパトロール

2. 「青色防犯灯の試み—小杉町2丁目町内会—」



小杉2丁目町内会での青色防犯

小杉2丁目町内会では、10月から1月までの4カ月間、町内会が設置管理している防犯灯82灯を「白色防犯灯」から「青色防犯灯」へ替えました。これは“防犯に効果がある”と言われている青い防犯灯の効果を確かめるとともに、地域での犯罪に対する意識を高め、街ぐるみの防犯対策を進めることが目的に試験的に実施したものです。

事前に3灯だけ行われた試験設置では「少し暗い」といった意見と同時に「落ち着いた雰囲気」と「犯罪抑止効果」を期待する意見が多く寄せられました。

10月1日には点灯式が行われ、役員が町内をパトロールしました。吉房正三小杉町2丁目町内会会長は「この取り組みを通じ、街ぐるみで防犯に力を入れていることを強くアピールしたい」と話してくれました。

3. そのほかの取組み

[地域で]

- ・地域の安全安心情報交換会（井田中学校区地域教育会議主催）で、区民会議での取組みを紹介した。また、近隣の町内会と防犯活動での連携を始めた。
- ・新城小のあいさつ運動では、児童の希望により 5、6 年生が地域ボランティアとともにあいさつ運動を行うようになった。また、あいさつ運動についてのアンケートを実施した。
- ・丸子地区は、平成 19 年 2 月から子育てサロンであいさつ運動を取り入れた。
- ・西丸子小学校では安心安全拡大委員会が設けられ、学校、地域、保護者との連携がとれるようになってきた。
- ・木月地区の見守り活動は、民生委員児童委員協議会だけでなく、老人クラブも参加するようになった。
- ・小杉町 2 丁目町会で「子どもの見守り運動」を月 3 回、行うこととなった。
- ・小杉町 2 丁目町会では、「災害時一人も見逃さない運動」として、要援護者の災害時安否確認のための資料作成などの取組みを始めることとした。
- ・「小杉駅周辺エリアマネジメント」では、エリア内で住民の入居にあわせて「わんわんパトロール」をマンションペット委員会委員とともに計画している。
- ・中原区安全・安心まちづくり地域推進協議会では、地域全体の防犯・防火意識の高揚を目的に研修会を開催し（平成 19 年 2 月 20 日開催）、高齢者の見守りネットワーク活動などの活動事例報告を通じて区民への啓発に努めた。また、子ども安全の日」を制定し、地域ぐるみで子どもたちを犯罪や交通事故から守る取組みを開始した。

[学校および行政として]

- ・毎月 10 日の防犯の日を中心に、青色回転灯などを装備した広報車で地域巡回パトロールを実施し、犯罪・火災発生の抑止に努めている。
- ・区役所所有の公用車 13 台に新たに青色回転灯を装備し、平成 19 年 2 月から公用車で区内を巡回する際には青色回転灯を点けて区内を走行し、犯罪・火災発生の抑止に努めた。
- ・平成 19 年度から中原区協働推進事業において、青色回転灯を地域での自主防犯パトロールに貸し出す事業を開始した。
- ・警察官 OB の「スクールガードリーダー」2 名を配置し、上丸子小学校を拠点に区内小・中学校、高等学校を回っている。また、地域パトロール隊に対して、見回りのポイントなどの相談や指導をしている。
- ・中原小学校では、毎日の児童の下校時刻を地域パトロール隊へ計画的に知らせるなど連絡を密にとることによって、パトロール隊の活動がよりタイムリーなものになってきている。

ゲスト
報告

モトスミ・ブレーメン通り商店街振興組合理事長 伊藤博

モトスミ・オズ通り商店街振興組合副理事長 中野勝久

伊藤 ブレーメンという名称の使用許可を受けた際に、ドイツのブレーメンにあるロイドパサージュという商店街との友好関係から環境の取り組みが生まれてきた

一店一エコ運動は、平成15年度に市の「頑張れモデル商店街事業」の中で、どこの商店街でもできる、お金をかけずにできるということで始めた。現在70店舗が取り組んでいる。一店

一エコ運動では、住吉小学校と井田小学校の子どもたちが「エコ調査隊」として夏休みにそれぞれの店にチェックに行っている。店では店頭にグリーンのポスターで取り組んでいることを掲げ、その取り組みについて調査隊は質問や評価を店に厳しくぶつけるため、各店は緊張感を持って運動に取り組んでいる。

中野 オズ通り商店街では、空き店舗を「街なかボランティア・ピース」とし、「寺子屋」などの事業を平成14年から始めた。たまたま慶應大学の学生と出会い、私から学生にお願いして一緒に活動するようになった。「寺子屋」は小学生を対象に、毎週土曜の午後2時から4時まで行っている。子どもたちは100円を持ってきて、勉強が終わった後お菓子やジュースを買い、みんな

でお話ししたり遊んだりしている。

伊藤 商店街でペットボトルや空き缶の回収を行えば、資源の持ち寄りに対してポイントを差し上げるこ

とで地域通貨につながり、ひいては商店街の活性化につながる。

中野 商店街とボランティアをどう結びつけるか、学生たちと話を進め、子どもを中心にした異世代間交流に取り組むこととなった。

伊藤 商店街は、基本的には商店街の会員の会費で成り立っている。ブレーメン通り商店街の組合加入率はかなり高いが100%ではない。大手ナショナルチェーンの中には、組合費、街路灯の電気代を払っていないところもある。これからの商店街というのは、安全・安心のまちづくりなどにお金がかかる。そういう現状があることを認識していただきたい。

中野 以前は平日に一時保育事業も行った。最初は無料だったが、だんだん厳しくなってきたため、一般は1時間1,000円、商店街への来客については1時間500円にした。その中でこどもの救急医療の仕方とか、パンの焼き方などの講習を行った。

「オズファミリークラブ」を会員制でつくった。携帯電話で空メールを打つとすぐに会員になれる。現在、1,000人ほどの会員がいる。これを利用して、災害時には、水の供給や炊き出しな



ブレーメン商店街での「一店一エコ運動」。商店街のエコバッグは、ドイツブレーメンから輸入しているそうです



商店街事務所を慶應義塾大学ボランティアサークルの活動拠点に。土曜日は小学生を対象にした寺子屋塾の日です

どの情報を供給することができる。

ビデオ 報告

モトスミ・プレーメン通り商店街、
モトスミ・オズ通り商店街における地域と連携した新しい取り組み

商店街店主から

「ここからいろいろな運動を発信できる商店街になればいいと思う。」プレーメン“ベーカーリー・パンドプ”

「高齢者や子どもたち、人にやさしい商店街になっていくといいと思う。」プレーメン“フレッシュマートワタベ”

「安心して買い物ができる、地域密着で住んでいる人を大切にしていきたい。」オズ“洋品橋本屋”

寺子屋に参加していた児童から

「ここには知らない子が多くて、でもすぐに知り合えて友達になれるところがいい。」小学校6年生

「勉強が終わって、みんなでゲームするところがいい。」小学校6年生

その他

「かつて商店街は生活必需品を売り、祭りなどを行って地域コミュニティの役割を担っていたが、これからは高齢者の拠り処とか、子どもの見守りとか、商いだけ考えるのではなく、そういう役割を果たしていくのは商店街の責任ではないか。」中原区商店街連合会会長 尾澤良二

「東横線が高架になり、プレーメンとオズとが初めて合同でイベントをした。小杉再開発に対し、両者が一緒に販促活動ができたらしい。」プレーメン通り商店街振興組合理事長 伊藤博

「若い人が商店街に入ってくると、まちが活性化してくる。お客さんも元気になるんじゃないか。」オズ通り商店街振興組合副理事長 中野勝久

「まちの人たちが会うたびにあいさつができて、新しく入ってくる人を笑顔で迎えられる、そんなまちになったらいいと思う。」オズ通り商店街振興組合副理事長 中野勝久



酒屋宇野商店の焼酎の量り売り。最近ではマイボトル持参のお客さんもいるそう



慶応義塾大学ボランティアサークル「ピースプロダクション」による商店街の清掃活動。店主や道行く人にあいさつをかけながら行います

会議で の意見

- ・プレーメン通りのマイバッグ持参運動は、取り組みやすく、環境問題にもいい。
- ・区全体を見るとその場その場の商店街でイベントを行っているため、ばらばらの感じがする。地域の住民としたら、身近な商店街同士が一つになる形で、まちとして売り出せば商店街の大きさを市民にPRできると思う。
- ・小杉駅周辺の再開発で新住民が相当入ってくると、既存の商店街はもうちょっと仲良くしないと押されてくるのではないかと。ぜひ、プレーメンやオズ両商店街のノウハウを採り入れてほしい。

- ・最近では大型店が増え、昔、例えば豆腐屋さんだったら朝3時、4時から商売をしていたというような職業観を子どもたちに感じ取ってもらうことが減ってきた。ぜひ商店街の方々に、地元の小中学生、高校生、大学生たちと触れ合いができるよう頑張ってもらいたい。
- ・お年寄りや子どもたち、足の不自由な方などのために商店が中継点になって配達できるようなことができないか。また、昔の御用聞きのように電話一本で持ってきてくれるようなこともできないか。
- ・子育て中のお母さんから聞いた話だと、2、3人の子どもを育てていると買い物も美容院も行けない状況があるようなので、寺子屋のように有償でもいいから子どもを預かってくれる場所ができるといいな、と思った。
- ・商店街が活性化することによって、そこに住んでいる人たちにとっても暮らしやすいまちになる。
- ・市や国からお願いしたり、法制化したりして、コンビニなど大きな企業にも組合に入ってもらいたい。
- ・新丸子駅から等々力まで案内サインを設置すると聞いている。サインに商店街の名前を入れるなどすれば商店街の活性化になるのではないかな。
- ・私の娘は、買い物は川崎駅前の大型店に行っている。少し時間がつぶせるような、そういう商店づくり、商店街づくりがこれからあってほしい。
- ・中原区でも例えば「デートスポット探検隊」や「のぼりとゆうえん隊」のような活動、まちの活性化のための活動をぜひ商店街、若い人たちと一緒にやっていきたい。
- ・地域に目を向けるようなことが製造業を含めて商店街に出てきていると思う。商売はもちろん基本だが、地域と関わりを持つということを一つ一つの店が考えてほしい。例えば、「一店一いいこと運動」みたいなことを商店街でまとめて情報発信してもらえると地域の人は行ってみたいと思うようになるのではないかな。

地域での取組

会議をきっかけにして、区では川崎市新総合計画川崎再生フロンティアプラン新実行計画において、「商店街と連携した地域のまちづくり推進事業」を20年度から3年間、重点的に進めていきます。商店街を地域コミュニティの場として活用できるよう、新たな取組みの実施に向けて商店街や町内会、子育て世代を交えての検討会が始まりました。

また、19年の市商店街連絡協議会においては、チェーン店の商店会加入を要望しました。オズ通り商店街では、子育て世代に新たなサービスを提供する検討会も始まっています。

1. 「商店街と連携した地域のまちづくり推進事業—懇談会がスタート—」

商店街を地域の情報交換や交流機能等地域コミュニティの場として活用し、地域の活性化の促進に向けた新たな取組みについて意見交換や情報交換をする「中原区商店街と連携した地域のまちづくり懇談会」が平成19年12月にスタートしました。

会のメンバーは、区商店街連合会、町内会、婦人部連絡協議会、区内子育てグループ、区役所、市経済局。

「個店ではなかなか対応できない。今は人手がなく、商店街も高齢化している。」「空き店舗は簡単には借りられない。使うためには、家賃、改装費などが必要。」「地域には高齢者が多いので、よろず屋のように一箇所で全部買えたり、商店街の中に休憩所があったりすれば便利。」「オズ商店街では、託児サービスがあって助かった。」「小さな子ども連れだと、商店街に自転車置き場やベビーカー置き場があるといい。」などそれぞれの立場で、商店街の現状、地域における高齢者や子育て

世代の買い物時の大変さなどの意見や情報が交換されました。

お互いの状況を把握し、2回目では具体的な取組み内容について取り上げました。

20年3月までに懇談会においてモデル的な取組みを決定し、4月以後、順次実施していく予定です。

2. 「商店街における子育て支援—モトスミ・オズ通り商店街子育て支援検討会—」

地域における商店街の役割として、また商店街のサービスとして、商店街ぐるみで子育て世代を応援しようとモトスミ・オズ通り商店街では新しいサービスメニューの検討のため、平成19年10月から商店街事務所で子育て支援検討会を始めました。

会に参加しているのは、オズ通り商店街振興組合、子育てグループ、慶応義塾大学ボランティアサークル、中小企業診断士、神奈川県商工労働部商業観光流通課。県の補助を受けて会を実施しています。

会の中心は、中小企業診断士。プロの目から成功例を引き合いにプランニングを作成、子育てグループの積極的な意見を採り入れながら具体的な企画に練り上がっています。

現在企画が進んでいるのは、商店街商店主が講師となった生活実用講座の開催。鮮魚店主が魚のおろし方を、青果店主が野菜の見分け方と切り方を教授するといった具合です。講座開講中、子どもは慶応大学の学生が面倒をみます。この日の会議では、葬儀屋さんのマナー教室や母の日に向けて父と子のカーネーション花束づくりも楽しそう、とのアイデアがお母さんたちから出ました。記念すべき第1回目は平成20年3月末に「魚のさばき方・盛り付け方講座」が開催予定です。

講座にはほかにもお母さん記者による情報紹介を計画中。オズ商店街で気になるお店について紹介記事を作成し、商店街事務所へ送付、これを「オズ・ファミリークラブ」会員の携帯電話にメール送信するサービスです。オズ通り商店街では、区民会議後、区役所から子育て情報を定期的に受け、それを会員に送信するサービスも行っています。

会では、他市商店街の事例視察も計画しており、子育て世帯にもやさしい商店街を目指した取組みが進められています。



オズ通り商店街子育て支援検討会。商店街事務所で開催しています。20年3月末に企画第1弾「店主による生活実用講座」がいよいよスタートします

3. そのほかの取組み

【地域で】

- ・中原区商店街連合会で、高齢者の困りごとを支援する事業を目指した研究を始めることとした。
- ・中原区商店街連合会として、商店街で取り組んでいることも110番や見守りへの取組みを一層きめ細かくし、啓発活動を行う。
- ・中原区商店街連合会では、各地区の商店街の活性化や振興策の参考例として定期役員会において、区民会議のビデオ、議事録などを報告した。
- ・今後商店街の会合の中で、地域との連携策など機会を捉えて話し合っていくよう努めていく。
- ・子育て支援推進実行委員会として、地域の商店主に子育てサロンの案内やボランティア（スタッフ）募集のチラシ、子育て情報紙などの掲示を依頼し、買い物客に広報できるよう現在検討している。

- ・子育て支援推進実行委員会として、中原区で創刊した「子ネット通信」を開業医に置いて、子育て中の保護者に配布できるよう現在調整している。
- ・子育て支援推進実行委員会として、区内に転入してきたばかりの保護者へ子育てサロンを通して地元商店街の紹介やお買い物情報などを提供できるような取り組みを検討したい。
- ・平成 19 年から、小杉地区、丸子地区の 14 商店街、市民文化団体及び行政がパートナーシップを組み、「丸子・小杉桜まつり」を開催した。
- ・丸子多摩川観光協会では、平成 19 年 11 月に「阿波踊り」のイベントを丸子地区商店街で盛大に行った。
- ・平成 19 年、新城駅周辺の放置自転車の取り締まりを新城商店街と地元町内会とで協力して実施した。
- ・「なかはら 20 年構想委員会」で、小杉駅周辺について商店街を含んだ散策マップ作りを現在検討している。

[行政として]

- ・新丸子駅から等々力緑地へ誘導するために設置した案内サイン（計 3 カ所）に、商店街の名前を入れた。
- ・「川崎市商店街連絡協議会」において、商店街とチェーン店がお互いに認識を共有し、共に商店街の活性化や地域貢献に取り組んでもらえるよう、区民会議における意見を伝えた。
- ・商店街が地域の情報交換や交流の場など地域住民の生活を支援する地域コミュニティの核として期待されており、今後区役所としても地域と商店街との連携を一層強化していく。
- ・区役所保健福祉センターの関係課が、中原区地域福祉計画の中で「商店街と連携したまちづくり」を位置づけ、「中原区商店街と連携した地域のまちづくり懇談会」に参加し、地域福祉の側面からモデル事業に参加・協力している。

19年度
第1回
070713

「地域に参加し、地域に学ぶ」

ーみんなが地域活動に参加しやくすくなるヒントを考えるー

平成19年7月13日(金) 午後2時～5時

ゲスト

市立井田病院園芸ボランティアセントポーリア班 黒川登志恵、
「とどろき水辺の楽校」写真記録ボランティア 本告龍造、
「老後を良くする会」配食サービスボランティア 山本幸彦、
「富士通フロンティアーズフラッグフットボールクラブ」コーチ 輪島章司

- 輪島** アメリカンフットボールにもう20年ぐらいお世話になっており、お世話になったスポーツに対して恩返しというか、ぜひそれを広めていきたいという思いからボランティアをやってきた。
- 山本** お弁当を配るというのは、ただつくって配るだけではなく、手渡しをしながら顔色を見て、元気かどうかの見守りも兼ねている。お弁当を楽しみにして、配る時間にわざわざ外まで出ている方もいるし、「おいしいお弁当をありがとう」の一言が、つくっている人たちの励みにもなっている。
- 黒川** 病院内の中でボランティアを受け入れてくれる組織がしっかりしており、困ったことも相談できる。病院や中原区の方々に支えられての活動で、ほかのボランティアに比べて恵まれていると感じている。こういうボランティア活動もあってもいいのではないかと感じた。
- 本告** 町内会では自分が一番若手ではないか。もっと若い人に町内会の活動に入ってほしい。水辺の楽校は幼稚園児や赤ちゃん連れのお父さん、お母さんも参加してくれるすばらしい会である。

ビデオ 報告

市立井田病院園芸ボランティアセントポーリア班、
「とどろき水辺の楽校」写真記録ボランティア、
丸子通り1丁目町会、
「老後を良くする会」配食サービスボランティア、
富士通フロンティアーズフラッグフットボールクラブ

富士通フロンティアーズフラッグフットボールクラブのみなさんから

「自分の子どもを通して参加することが多いと思うが、子どもと接する時間は小学生くらいまでだと思うので、ぜひ迷わないで子どもと積極的に遊んでほしい。」

「子どもの成長が見られるのはすごく楽しい。」

「子どもと同じ目的を持って楽しめるというのがいいと思う。」

「子どもと一緒に楽しめる形を見つければ、いくらでもこういう形があると思うので、そこから始めたらどうか。」

「老後を良くする会」配食サービスボランティアのみなさんから

「みんなが楽しんでやっている。それが続く秘訣。」

「地道にやっている活動がなかなか普通の人に分からない現状がある。いろいろな形をつくって調べられるようになると参加する人が多くなるのではないかな。」



富士通フロンティアーズフラッグフットボールチームの練習風景



中丸子老人いこいの家でのお弁当づくり。
今から配達です

市立井田病院園芸ボランティアセントポーリア班のみなさんから

「子どもがこちらの病院にお世話になったので、恩返しができたら、と思ってボランティアを引き受けた。」

「診察を受けに来た時にボランティア募集のポスターを見て応募した。」

「ここで知り合って、そこからまた交流の輪が広がっている。」

「患者が喜ぶのはもちろんうれしいが、自分自身も癒してもらっている。」

「花を通しての仲間づくり、人とのふれあい、仲間を通じて聞きする楽しさがすばらしい。」

「やってみようかな、と思うことが一番。受入体制はいろいろな所である程度あると思う。まず、声をかけてみることでいいか。」

「とどろき水辺の楽校」のみなさんから

「ボランティアをはじめて一番楽しいのは、子どもたちの喜ぶ姿を見ることです。土日が充実して、最近は仕事のある平日より忙しい。」

「スタッフとして頑張るとか、肩肘張ったらボランティアは長続きしない。一参加者として参加するくらいが継続できる。」

「表に出て仲間を見つける。それが一番大事。」

「仕事以外の人生、それが発見できたことがすばらしい。」

丸子通り1丁目町会のみなさんから

「その人にふさわしい役を町内会につくって迎え入れた。」

「町会っていうのは何やっているのか、参加しないと分からない

ような組織。知らなかった人と知り合え、飲み仲間が増えたのがうれしい。普段は会社での付き合いが多いが、自治会に参加して近所の付き合いが増えた。これからは、だんだん会社から地域に活動が移っていく、そういうことではないか。」



栽培室で花の世話をする井田病院園芸ボランティアセントポーリア班



「とどろき水辺の楽校」で写真ボランティアを続けている本告さん



丸子通り1丁目町会の清掃活動

会議での意見

- ・ビデオ報告を見て、地域で活動する上で参考になるところが何点もあった。
一つは、子どもをきっかけに親を集める手段とか、講習会や勉強会を設けて参加してもらおうとか、町内会では役目を作ってあげることによって会に入ってもらおうとか、具体的にこういうことをやっている、こういうことをやってほしい、とはっきり言うことがポイントではないか。活動を継続させていくという点では、ボランティアならば相手から感謝の気持ちが伝わってくることでまたやろうという気持ちが継続していくとか、自然体でやっていくことが大切とか、飲み仲間をつくるのがあったかと思う。また、課題として、町内会だと参加してみないと何をやっているかわからない、ボランティアグループだと何をしているかわからない、といったなかなか情報がないことがあるのかなと思う。区民会議も2年目を迎えたので、みんなでこんなことをやっていこうということが意見の中からまとまっていくとよい。
- ・ただボランティア活動に参加してください、と言ってもだめだと思う。その人その人の持っているスキルを最大限に生かせる場をつくってあげる、その場に合った仕事をしてもらうのが一番だと思う。

ボランティア活動は、全部自分持ちで本当に好きでやってもらうわけなので、自分の納得する活動を自分の思いどおりにやってもらうことが一番である。

- ・町会も高齢化し、役員のなり手がいない。自分たちで率先して誘っていかないと、なかなか町会の役員にはなっていない。お祭りとか運動会、盆踊りは、一番コミュニケーションが図れる場である。これらが基本になって、地域に参加することが進んでいくのではないかな。
- ・昨年の区民会議報告書を運営している学童保育教室の保護者に配布したところ、皆さんが区をよくするために活動していることを知って、すごくうれしかった、ありがたい、といった感謝の言葉と、自分もできることからやってみたいという意見があった。
- ・親子でも夫婦でも、家族ぐるみで活動できると仲間ができるのではないかな。
- ・楽しくなければなかなかできないので、やっている方の楽しいという声をウェブとか区役所のホームページに入れて、「若いお父さん求む」みたいな形で声かけに協力いただけるといいと思う。
- ・日本でのボランティア活動は、仕事を持っていない人が主にやっている。仕事を持っている人でも参加できる環境を工夫する必要があると思う。
- ・独身の人も参加できるような、全ての世代が何らかの形で参加しやすい環境が必要である。
- ・町内会は、参加しない人から見ると何をやっているのかわからない。こういう活動をしているとか、住民にとってこういうプラスがあるということを積極的に訴えて、全員が参加できるような環境になるとよい。
- ・町会の会合になかなかお父さんが出てこないの、町会で今月、母親クラブの協力でパパーズクラブを立ち上げる。入口は広く楽しくということで、親子サマーコンサートや芋堀り、枝豆取りなどを計画している。いずれは参加した方が町会の役員にという心根もある。
- ・区民としては、区役所に窓口ができたり、どこか1カ所に聞けば情報がすべて網羅できるような団体間のネットワークができたりすることが大切だと思う。広報紙はたくさんの方が見るので、そこでそれぞれの活動を案内して募集をかけていくことも大切だし、区民会議に出ている我々委員も、中原区にどういうボランティア団体があって、どういう活動をしているかという情報を持っていると、問題点の解決にもつながる。そのネットワークづくりが大切である。

地域での取組

会議をきっかけにして、区では平成20年3月10日、ホームページ「区民交流サイト・webなかはらっば」を開設しました。このサイトでは、あらかじめ利用登録した市民活動団体、サークルなどが活動の様子やイベント情報を自由に発信できます。

また、併せて地域の市民活動の拠点として利用されていた区役所5階の「区民活動支援コーナー」も装いを新たに「区民交流センター・なかはらっば」としてオープンしました。

1.「区民交流サイト“webなかはらっば”と区民交流センターがオープンしました」

区民交流サイトはインターネットで町内会・自治会・市民活動団体が情報発信することができる新たなホームページです。このサイトでは、あらかじめ利用登録した団体がイベントや講



平成20年3月10日の中原区民交流センター開設式

座の案内などの情報を自由に発信することができます。また、個人利用者は、関心がある分野の情報を自動配信するメールマガジンサービスも受けられます。

また、区民交流センターはこれまで「区民活動支援コーナー」として利用されていた区役所5階フロアを、装いを新たに開設しました。誰でも気軽に立ち寄ることができる交流の場・フリースペースをはじめ会議室、印刷室も設けられています。地域で活動する団体は事前登録をすれば、会議室、印刷室が利用できます。地域活動についての講習会や勉強会を行う「まちづくりサロン」も毎月第2水曜日に開催します。サロンはどなたでも参加できます。



まちづくり推進委員会と協働で立ち上げた区民交流センター「なかはらっば」



平成20年3月10日にオープンした区民交流サイト「webなかはらっば」

2.「市政だより中原区版で町内会・自治会活動を連載記事で紹介」

市政だより中原区版では、町内会・自治会の活動のようす取材し、広く紹介することで、町内会・自治会に親しみをもってもらおうと、川崎市政だより中原区版平成20年1月1日号から連載記事を始めました。

タイトルは「町内会活動豆辞典」。高齢者の声かけ運動やお花見・もちつき大会、ダンスなど特徴的な取組みを紹介しています。少しでも地域を守る町内会・自治会の活動をより多くの人に理解してもらい、より多くの人が参加できるよう区役所広報担当が現場に赴き、元気な活動の様子取材を行っています。

3. そのほかの取組み

【地域で】

- ・「とどろき水辺の楽校」の活動を小杉陣屋町1丁目町会にも参加を呼びかけていく予定。
- ・「とどろき水辺の楽校」と中原ロータリークラブとの連携を進めている。
- ・小杉2丁目町会で青色防犯灯を設置したことについてアンケートを取ったら様々な意見があり、今後の町内会のあり方や活動の参考となった。
- ・子育てサロンの案内チラシに、地域ボランティアの募集を掲載して参加を呼びかけている。



中原区版での町内会・自治会を紹介する連載記事

- ・「なかはら子ども未来フェスタ」や「なかはら福祉健康まつり」で子育てサロンを紹介した。
- ・中原中学校区地域教育会議では、七福神めぐり、桜散策、スマイルを見る会など地域と交流しながら学習している。
- ・新丸子子ども文化センター運営協議会と中原中学校区地域教育会議とで協力して高校生とのこども文化センターペンキ塗り、上小田中7丁目の畑で「親子・高齢者とのさつまいも掘り」などの会を開催した。

[行政として]

- ・地域福祉講座において、小杉地区社会福祉協議会では、「町内会や社会福祉協議会内の住民ニーズ、課題を福祉の視点で考えよう」をテーマとしてワークショップを開催し、地域が抱える福祉課題について意見交換を行った。
- ・第2期地域福祉計画で地域の福祉活動に関心を持つきっかけとして、ワークショップ、中小企業などへの「まちなか講座」などの施策を計画、20年度から実施を予定している。

19年度
第2・3回
071025
080118

「地域で取り組む環境対策」

—わたしたちにできる“環境”を考える—

平成19年10月25日(木) 午後2時～4時30分

平成20年 1月18日(金) 午後2時30分～4時50分

ゲスト

中原区在住 中山育美

川崎市環境局地球温暖化対策担当 広瀬健二

広瀬 一昨年の8月の平均気温によると、川崎市の中では中原区が一番平均気温が高い。

地球温暖化というのは、二酸化炭素が多くなるということ。二酸化炭素による温室効果で気温が保たれているが、現在多くなりすぎている。

市の温暖化対策地域推進計画では、CO₂の6%削減を目指している。家庭やオフィスで電気やエネルギーの使用をなるべく減らすのと併せて、今は太陽光や風力でエネルギーと作り出すことができる。

温暖化対策には小まめに行動することが大切。省エネの電気製品を買う、ハイブリッドカーに乗るなどして技術を活用することも必要。

エコドライブやごみの収集リサイクル、レジ袋削減などの実例を議論の参考にしてほしい。国際交流センターには共同発電所を設置しているところである。

なお、今年10月、県知事、横浜市長、川崎市長の連名で環境行動協調宣言をし、持続可能な社会の実現に向けて地域の温暖化対策、環境対策に取り組んでいくこととなった。

中山 グリーンコンシューマーという概念は、環境に配慮した買い物をする人という意味合いで、川崎市をエコショッピングタウンにしようと活動している。環境に配慮した商品を売る店も増えないと育っていかないので、店と消費者とが協働して増えていくように活動したい。

グループでは、プレーメン通り商店街での「一店一エコ運動」、エコショッピング・クッキングなども行っている。

環境に関心の高い人にはリーダーとして行動してもらい、とりあえず仕組みがあるのでやっているという人には、その意義をほめてあげることでやる気を起こさせる。関心はあるけれども行動になかなか移せない人には、「楽しい」とか「得する」という情報や仕組みがあるといい。行動に移して継続するためのポイントは、なぜそれが必要なのか、重要なのかということが納得できる情報があるといい。ペットボトルを分別した後リサイクルしている工場を見学に行くとか、体で体験できることが継続していくことにつながる。

環境というのは一つの切り口であり、小さなことでもできることから継続していくことが大事である。それを企業、行政、ほかの市民グループや隣の人と連携していけることが大事なことであり、課題である。

ビデオ 報告

川崎市立上丸子小学校及び川崎市立井田小学校における環境学習

中原区子ども会議における“環境”テーマ

「とどろき水辺の楽校」における取り組み

中原区役所における緑のカーテンの取り組み

上丸子小学校から

「多摩川を外から見ていると分からないが、一步中に入るとものすごい命の輝きがある。それを子どもたちは学習を通して肌で感じている。」上丸子小学校 橋本校長

「多摩川学習をした子どもたちが、20年後、30年後、自分たちが多摩川の自然、多摩川のきれいさを守っていく、そういう責任が今度は自分たちにもあるんだ、ということを感じてくれれば。」上丸子小 橋本校長

「彼らが大人になった時に、地域を誇れるものを彼らの心の中で育てていきたい。」上丸子小 橋本校長

「一緒にやっていて喜んでいる子どもたちの顔を見るのは幸せ。ふるさとにこんなすばらしい川があるっていうことを地域の財産として、一つの学級の取り組みですけど、広がりとして地域に根づくといいですね。」中本賢

「水辺に来ると素直になりますね。子どもは昔も今も変わらない。いい思い出をたくさん作ったと思います。」中本賢

井田小学校から

「地球を支える行動はまず足元から、そのことが地球を考えることになるんだ、言葉だけでなく実践ができる子になってほしい。」井田小学校 新村校長

「自分たちだけでなく地域で頑張っている人を知ること、自分たちも輪の中に入って地球を守る一員になっていくこと、そしてそれを家庭に持ち帰って家庭でもエコに積極的に取り組んでくれることで輪が大きくなっていくこと。少しずつ自分たちにできることを大事にしながら、これからもエコの学習をしていきたい。」井田小学校 新村校長

「とどろき水辺の楽校」から

「多摩川の持つ自然を次の世代に伝えていくには、今からコツコツとこういう参加している子どもたちにわかってもらわないといけない。」鈴木真智子

「一般の市民で多摩川大好き、植物でも鳥でも昆虫でも一生懸命学んでいる人をゲストティーチャーにお願いしている。ボランティアスタッフもほとんど中原の人。地域の人と一緒にやれる、一番ですね。」鈴木真智子

「多摩川をうまく利用して、活用して、そしていつまでも一緒というのがいい。」植物博士 酒井昭子

「安全管理の芽がある中で、危険も知りつつ体験して自分がどう対処すればいいかが身につけば、子どもたちにとって最高ではないか。」ボランティアスタッフ 河村順子

「しがらみから開放される場所がそれぞれの心の中に一つずつあればいい。もし、その中の一つに



上丸子小の多摩川学習。4年生は中本賢さんとガサガサ体験をします



井田小の4年生の環境学習。今日は橋リサイクルコミュニティセンターで紙すきと廃油を利用した石けんづくりを体験



「とどろき水辺の楽校」で川遊びと清掃をして、子どもたちと河原で談笑する鈴木委員。この後、昆虫探しとマメのごちそうが待っていました

子どもたちが多摩川を選んでくれれば、とてもうれしい。」鈴木真智子

会議での意見

- ・紙コップは1回使うとごみになってしまいますが、ある会議で出席者の方がすてきなカップを持参していた。色とりどりのいろいろな形のカップが席の前に並べば、会話も和やかになり、時間内で会議も終わるのではないかと思います。
- ・環境対策としてできることは一人一人のライフスタイルによって違う。意識して自分ができることをやるのが非常に大事だと思う。
- ・エコということは余り気にしないでふだん生活しているので、今日は自分が何もしていないのだということを感じている。宅地ができるたびに緑が減っている。緑のカーテン事業は、上に伸びていくつる植物を使い、広いスペースを必要とせずに行うことができる。中原区区民会議が中心となって、緑のカーテンを前区にアピールしてはどうか。
- ・リサイクルよりリユースのほうがコスト的には安い。
- ・たくさん出た意見を大きく分けると、リユースとリサイクルということだった。物を使わない、もらわないというような方向にライフスタイルを変えていくやり方もあるのかなと思う。
- ・正しい知識を得てからのエコロジーが非常に大事だと思う。
- ・区民会議発のエコ宣言をし、一つ一つの町内会に説明していくとか、いろいろな団体があるので、そういうところで年に1回ぐらい勉強会や説明会をしていければいいと思う。区民会議が中心となり、区役所と一緒にやっていきたい。

地域での取組

2回の会議では、各委員が取り組むこと、区役所として取り組むことを議論し、「中原区区民会議地球にいいことプロジェクト」として地域や家庭で取り組んでいくこととなりました。

まずは足元からと、会議では、ペットボトルのお茶を廃止、委員はマイボトルを持参しています。このプロジェクトは、第2期へと継続して、実践活動をさらに区内に広めていきます。

1. 委員による取り組み

	取り組み内容
区民会議	①委員による地域での実践活動
	②会議でのペットボトルのお茶を廃止
生富委員	①患者に薬袋を次回も持って来てもらうようにしたい。
小須田委員	①自宅にコンポストを設置して、堆肥作りを行う。
	②長時間点灯する電球をフィラメントタイプから蛍光灯に替える。
酒井委員	①工場協会事務所でペットボトルキャップの収集を行う。
佐野委員	①家庭でお得な温暖化対策を行う。

	②マイバッグを持参する。
	③マイボトルを持参する。
	④マイ箸を持参する。
	⑤出掛ける時は、徒歩か自転車で。
	⑥地域教育会議で子どもたちにエコについて考えてもらう。
鈴木委員	①多摩川クリーンアップ大作戦を実施する。
	②「とどろき土手の桜を愛する会」で、桜の木植樹後の維持管理。
	③必要な物を必要なだけ買う（エコショッピング）。
	④ペットボトルキャップの収集
高島委員	①印刷物の裏面の利用、古切手の活用
	②団体の定例会で環境について話し合う。
竹井委員	①環境ドキュメンタリー映画「不都合な真実」の上映会を実施。
	②国際交流センターに太陽光発電設備・市民共同発電所を設置するため、市民に募金を呼びかける。
内藤委員	①事業内での食事やおやつに塗り箸を使う。
	②おやつ等での生ゴミは、細かくして学童の畑に肥料として埋める。
	③落ち葉を集めて、自家製の堆肥をつくる。
	④不要となったピアノカ、リコーダー、サッカーボールを海外(エチオピア、カンボジア)へ届ける。
	⑤事業所で学童とペットボトルキャップの収集を行う。
	⑥マイ箸を持参する。
芳賀委員	①節電
	②節水
	③暖房の制限
	④風呂の利用制限
	⑤自家用車の利用を控える。
	⑥ペットボトルキャップの収集に協力する。
	⑦緑のカーテン
原委員	①待機電力の節減
	②チラシなどは、リサイクルとして出す
	③洋服の寄附（リユース）
東田委員	①自宅でペットボトルキャップの収集
	②レジ袋の削減
	③自動車の利用を控え、自転車を使用
	④ゴミの分別収集の推進
	⑤消費電力の削減
	⑥両面印刷、裏紙利用、メール利用で紙の節減
	⑦プリンターのインクカートリッジの回収
	⑧洗濯機の使い方の工夫

藤枝委員	①中町連で環境に関する視察研修を行う。
松本委員	①子育てサロンで子どもたちの洋服の着回しを進めたい。
	②子育てサロンでのアンケート調査
	③エコクッキングをする。
	④自宅発エコ宣言をする。
水品委員	①暖房の使用を控える。
	②マイバッグ、マイ箸
	③節電
	④電球型蛍光灯の使用
	⑤節水
村上委員	①使用する電池を充電池式に切り替える
	②商店街でリユース瓶普及のためのモデル事業実施
	③飛行機でなく、電車を利用
モハammad委員	①物を大切に使う。
	②リユースを大切にする。
吉房委員	①ペットボトルキャップの収集を町会で実行している。
	②レジ袋の削減を町会ぐるみで行う。
	③エコドライブの推進を町会ぐるみで行う。



ペットボトルキャップ収集についてCATV局の取材を受ける吉房委員。区役所にも回収箱を置いたところ、3カ月で200kgを超えるキャップが集まりました。問合せは区内のみならず、逗子や綾瀬などの県内各地、都内、熱海、我孫子と関東一円から連日届きます



内藤委員の経営する学童保育でもキャップの収集を始めました



新城商店街におけるガラス瓶のリユースシステムモデル事業。キャンペーンを平成20年2月に開催しました



会議でビンの紹介をする村上委員

2. 区役所としての取り組み

1	「中原区役所一課一エコ運動」	
	対象:	区役所全職員としての取り組み
	内容:	プレーメン通り商店街の「一店一エコ運動」に習い、各課で業務の特徴を生かした取り組み内容を決めて身近な環境運動に取り組みます。取り組み内容は、掲出用紙に書き込んで、市民から見えるよう各課カウンターまわりに貼り出します。
	効果:	区役所としても区民会議での取り組みを職員全体で推進し、区民会議委員の取り組みとあわせてアピールしていきます。
2	「(仮称)ゴー！ゴー！ゴーヤ！すくすく成長日記」リーフレットの作成	
	対象:	「緑のカーテン」普及啓発事業のため、市民に。特に小学校や保育園、団体向けに。
	内容:	平成19年度試行で実施した緑のカーテンの成長記録及び育て方のコツを写真とイラストで紹介し、20年度予定している「緑のカーテン普及啓発事業」において、ゴーヤセットを貸与する際に一緒に配布します。また、緑のカーテンを授業で育てる区内の小学4年生に、さらには保育園や子ども文化センター等にも配布を予定しています。
	効果:	市民に環境や緑のカーテンに興味を持ってもらうことを目的とします。また、「緑のカーテン普及啓発事業」実施の際のガイドブックとしても活用します。
3	中原区役所エコギャラリー(小学校における環境学習等の展示)	
	対象:	来庁した市民
	内容:	区役所1階ロビーに、学校での環境学習の成果、エコロジーアートの作品を展示し、来庁した市民に環境について啓発を行います。小学校での環境学習の成果品等を予定しています。
	効果:	市民の環境への啓発。
4	地域でのペットボトルキャップ収集の協力	
	対象:	区役所全職員及び来庁した市民
	内容:	吉房委員が町会で実施しているペットボトルキャップの収集に区役所も協力します。区役所及び保健所に回収ボックスを複数設置します。
	効果:	資源の有効活用。市民に対するPR。
5	平成20年度緑のカーテン事業	
	対象:	緑のカーテンの普及
	内容:	栽培に参加する団体を公募し、町会や市民活動団体、保育園等へゴーヤの種、プランター、土、肥料を貸与します。
	効果:	ヒートアイランド対応。省エネ対応。市民に対するPR。
6	区役所職員ネームプレートへの「中原区区民会議地球にいいことプロジェクト」マークの導入	
	対象:	中原区役所全職員
	内容:	職員のネームプレートにこの取り組みのマーク(イラスト)を導入し、全職員で環境に取り組んでいる姿勢を市民にアピールします。
	効果:	職員の環境への取り組みへの意識づけ、及び来庁した市民へのPR。

	時期:	平成20年1月15日から実施、第2期区民会議に継続。
7	「中原区民会議地球にいいことプロジェクト」区ホームページでの PR	
	対象:	市民
	内容:	このプロジェクトを区の HP で紹介する。
	効果:	市民に対する PR.
	時期:	20 年度に開設する。



「中原区民会議地球にいいことプロジェクト」のイメージキャラクター、白くまの「ロジーちゃん」と地球の「エコちゃん」。ロジーちゃんは北極の氷が融けて中原区まで流れつきました。これから地域の取り組みやゴーヤーの絵本などで活躍していきます



区役所の「一課一エコ運動」。各課で取り組むエコについて、各課窓口に掲示しています

「まだ5月なのに・・・暑いなあ。
これじゃあ夏になったらどうなるの。」
北極の氷が溶けてしまったので、中原区に引越してきた白くまのロジーちゃん。
中原区の暑さに困っているようです。



中原区はヒートアイランドによって、18歳未満の子どもが熱中症に悩まされています。
(平成18年1月12日付け公開資料提供)

「ロジーちゃん、緑のカーテンがあると涼しくなるよ。」とうさぎちゃん。
「そうなの？じゃあみんなでゴーヤーを育てて緑のカーテンを作ってみよう。」



緑のカーテンにはこんな効果がある・・・
夏の光を遮断（ゴーヤー、きゅうり、あさがおなど）を育てると、暑さで室内の光を減らすことができます。また、壁には断熱効果によって、暑さを減らすことができます。また、壁には断熱効果によって、暑さを減らすことができます。緑のカーテンの効果を最大限に活用しましょう。

平成20年度、緑のカーテンを広げるため、育て方のコツを絵本にして制作しています。主に区内の小学校、保育園、幼稚園、子ども文化センターなどに種などと一緒に配布して緑のカーテンを育ててもらいます。併せて栽培に参加する団体を公募します



平成19年夏、区役所で育てたゴーヤー、きゅうり、あさがおによる緑のカーテン。
20年度は区内保育園、こども文化センターなどの公共施設のほか、栽培に参加する団体を公募して区内に広げます

プロジェクトの一環として区役所1階に平成20年3月に開設した「エコギャラリー」。第1弾として、市立上丸子小学校の環境学習の成果を掲示しています



中原区区民会議では、マイボトル持参。会場入り口には、川崎の水道水を置いています